

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	近代日本における霊性論 : (2) 鈴木ビアトリスの霊性
Author(s)	宮嶋, 正子
Citation	HABITUS , 27 : 108 - 140
Issue Date	2023-03-20
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/53732">10.15027/53732</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/53732">https://doi.org/10.15027/53732</a>
Right	
Relation	



# 近代日本における靈性論

## (2) 鈴木ビアトリスの靈性

宮 嶋 正 子

(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期)

### はじめに

鈴木ビアトリス (Beatrice Lane Suzuki: 1878-1939) は禅と仏教学者である鈴木大拙 (Daisetz Teitaro Suzuki: 1870-1966) のアメリカ人妻で日本名を鈴木琵琶子 (法号: 青蓮院琵琶妙演大姉) という。鈴木ビアトリス (以下、ビアトリスという) は後述する英文仏教雑誌 *The Eastern Buddhist* の編集や英文校閲を通して鈴木大拙 (以下、大拙という) の英文での執筆に大きな貢献をなしたこと (大谷大学でビアトリスによる英語の教育を受けた学生であった小堀南嶺 (大徳寺龍光院住職: 1918-1992) は「ビアトリス先生の功績は何といっても、自己の仏教の理解と研究をそのまま世に問うというよりもむしろ、それを空しくして大拙先生の英文での著作の中に埋没された事にあると私は思う」<sup>1)</sup>とやっている) や、いくつかの逸話 (動物愛護への情熱や、大拙も時に辟易した厳格な菜食主義) 以外に彼女の功績については、あまり知られていない。大拙との関係でいえば、ビアトリスは禅や仏教思想について英語で話し合える無二の協力者であったことはもちろんであるが、大拙によれば「宿世の因縁というようなものをつくづく感じた」<sup>2)</sup>という。大拙は「亡妻の性格は内外玲瓏で矯飾がなかった。内に感ずるだけ外に現した。殊に家庭にあつては、本来の性格の動くままに行動したので誠に工合がよかった。……少しの腹蔵もなかったので、朝から晩まで話はずきなかつた。……社会の事象については、東西といわず、内外の新聞や雑誌

を読むごとに自分の意見を吐くことを忘れなかった」<sup>3)</sup>という言葉をもってピアトリスを追憶している。

では本論文で「鈴木ピアトリスの靈性」を取り上げる理由は何か、それは彼女の宗教実践・研究から生まれた菩薩心と菩薩思想に負うところが大きい。彼女の菩薩心・菩薩思想が生まれた背景を広くみていくことにより、靈性の普遍性と特殊性を探ることができるであろう。ピアトリスの靈性は高野山での宗教実践（あるいは経験）によって確定的なものになった。高野山はピアトリスの気持ちに深くかなった「場所」、すなわち「靈場高野山」での密教修学と修行であった。1924（大正13）年、大拙が京都の東寺に依頼し、吉祥真雄師について密教修行が実際に始められ、1927（昭和2）年9月には大拙同道で高野山に登り、事相を水原堯栄師に、教相を金山穆韶師、森田竜遷師、梅尾祥雲師の三碩学に学ぶ道が開かれ、以後十年にわたって毎夏必ず独りで高野山にはいった<sup>4)</sup>

（高野山修行期間はピアトリスが40歳代後半から50歳代後半であり、大谷大学教授時代であったことからみて、ピアトリスが情熱をかけた高野山修行には靈性のほとぼしりというようなものが感じられる）。ピアトリスは高野山で多くのことを学び（高野山修行については、第3節で後述する）、靈性を高め、菩薩思想を形成した。大谷大学時代、ピアトリス夫妻に親しく接した学生の岩倉政治氏（小説家：1903-2000）は、ピアトリスについて「情感が豊かで純真な人であった、

（大拙の）超脱枯淡に対して煩惱具足の凡夫性を備えていた、自然で純真な人であった」<sup>5)</sup>と評した。加えて上田閑照（哲学者：1926-2019）は「大拙にとってはピアトリスこそ、凡夫の世界に開く大切な窓となっていた」<sup>6)</sup>と言う。つまり、大拙の成した偉業は、ピアトリスなしではありえなかったということである。さらに付言するなら、大拙の数々の著作にある言葉や思想の裏側にピアトリスの靈性があったともいえる。ピアトリスと大拙が大谷大学で創めた **The**

Eastern Buddhist 誌において、大拙の *Essays in Zen Buddhism* 三巻に収められた諸論文の初出がこの雑誌においてであることから「宿世の因縁」であったものが、「同時に大きな世界精神史・靈性史的意義を帯びていたと言わなければならないであろう」<sup>7)</sup>と上田は述べる。

靈性はそれ自体普遍的なものであるが、一定の内的あるいは外的要因によって現実化・具体化されるものである。ビアトリスの宗教思想遍歴の足跡が内的・外的要因にあたり、最終的に普遍的なもの・靈性の内容（いかに自覚したか）に帰結する。

本論文はビアトリスの靈性に至る道程と靈性の内容を明らかにすることを目的としている。彼女の宗教思想遍歴の足跡をみていく方法として、来日前、後（第1節、第2節）に分けて述べる。

## 第1節 宗教思想の変容と深化；来日前の思想遍歴

ビアトリスは母エマ（Emma Erskine Lane:1846-1927）と父のレーン氏（Thomas Jefferson Lane）との間にボストンで生まれた。しかし、レーン氏が早逝したことで、エマはドイツ人ハーン氏（Albert Johann Hahn :1852-1920）と再婚、のち別居している。エマはスコットランド貴族アースキン家の出であったが、貴族の家を捨てて、米国の一平民と結婚したとされている<sup>8)</sup>。最初の夫であるレーン氏が早世した後、ボストンで女性労働運動、教会活動、そして新聞報道に関わり、社会問題に関心の深かった女性であった。さらには農場経営者の立場で農業回帰を実践提唱するなど積極的な社会活動を行い、ニューヨークでは女性団体、神智学、動物愛護活動に加わった<sup>9)</sup>。エマはキリスト教に代わる信仰を求めてイラン生まれの新宗教バハイに入信し、のちに神智学協会（Theosophical Society）の会員になった。エマはヨギの講演を聞くなど東洋思

想にかなり傾倒していた<sup>10)</sup>。ビアトリスも熱心な神智学徒であったうえ、日本で動物愛護をリードしたことを考えれば、神智学や東洋思想をはじめとした思想形成や社会活動のキャリアに与えたエマの影響は決定的なものだったといえよう。大拙はビアトリスを「一種反逆の気分が亡妻の母系にあったものと見える」<sup>11)</sup>と評した。19世紀末のアメリカで、社会活動家として活躍した母・エマ譲りの「反逆」気質を受け継いだビアトリスは、キリスト教的伝統信仰に飽きたらずに「異教的」新宗教を遍歴した求道者であり仏教者であると同時に神智学徒でもあった。大拙によれば、「アメリカではニューイングランド各州、殊にボストン付近には東洋的思索に対して深き了解を有する者が古くからあった。……ビアトリスも東洋思想に対して深い同情を持っていたのも偶然ではなかった」<sup>12)</sup>のであった。このような思想遍歴の最中で、ビアトリスは大拙と出会い、宗教思想の転換を迎えることになる。二人の出会いのいきさつは次のようなものである。

ビアトリスは名門ラドクリフ・カレッジを卒業後、New York School of Philanthropy（現在のコロンビア大学ソーシャルワーク学部）で修士号を取得した。ラドクリフ・カレッジの所在地ケンブリッジとその周辺は、超絶主義とクリスチャン・サイエンスの中心地であった。しかもアメリカ人であって日本仏教で最初に得度したフェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa:1853-1908）とビゲロー（William Sturgis Bigelow: 1850-1926）を生んだ土地でもあり、非正統的な靈的思想が盛んだった土地である。ビアトリスはそのような文化・思想環境にあって、ラドクリフ・カレッジでは、ジェームズ（William James: 1842-1910）、ロイス（Josiah Royce : 1855-1916）、サンタヤナ（George Santayana : 1863-1952）など著名な諸教授から哲学の薫陶を受けたのであった。しかし、彼女は、「これこそ自分のものだと思うような哲学は一つも見出すことが出来な

かった」<sup>13)</sup>という。ところが、『ヴァガヴァド・ギター』を読んで神智学やヴェーダンタ、(小乗)仏教を通して求めていた東洋の教えに近づいたのであった。このような状況にあって、1906(明治39)年にヴェーダンタ協会で開催された釈宗演老師(大拙の禅の師)の講演に大拙が通訳を務め、ビアトリスが聴講するという機会があった。老師の講演に感銘を受けたビアトリスは大乗仏教と禅について学びたいと老師に申し出、老師は大拙について学ぶように勧め、二人の交際が始まったのであった。「あるいは偶然ではなかったかも知れぬ因縁」<sup>14)</sup>を感じさせるほど深く結びついた二人は結婚することになり、ビアトリスは1911(明治44)年に来日し、終生日本を離れることはなかった。(結婚年齢は大拙41歳、ビアトリス33歳のとき)。

## 第2節 宗教思想の変容・靈性深化；来日後の禅および密教修行

大拙はビアトリスの来日より先、1909(明治42)年に帰国して東京帝国大学文科大学講師となっていた。翌1910(明治43)年に学習院教授となるも、宗演老師のもと熱心に参禅を続けていた。それで、ビアトリスも「夫が禅学者なので素より禅を修めた」<sup>15)</sup>のであった。ビアトリス自身も言う、「米国にいた時分に、既に宗演師について、幾らかの禅を学び得ていましたが、当時の老師でありました広田天真師の指導を仰いで、禅堂で坐禅することが出来ました。私は十二ヶ月を通じて何度も接心に加わりました。私は特別の座席を指定され、女性としてまた西洋人としてあまり目立たないようにと、黒の法衣を纏いました」<sup>16)</sup>と。このようにして大拙に導かれ、ビアトリスの靈性は花開くのであった。ビアトリスは大乗仏教の菩提心の教義に強く惹かれ、「大乗仏教ではすべての男女、すべての動物に、植物に、山に、川に、足許の塵に、皆仏性即ち仏果の種子が潜んでいて、それがやがて芽を出して終に仏果という完全な実を結ぶも

の」<sup>17)</sup>であり、「菩提心に気付くようになる事が、大乘仏教徒の生涯における注目すべき靈的経験」<sup>18)</sup>であると説いた。東京、京都では外国人仏教シンパを集めたロッジ活動を展開する傍ら、外国雑誌に寄稿して西洋へ「菩薩の理想」<sup>19)</sup>、すなわち *Bodhisattva ideal*<sup>20)</sup>を伝道した。ビアトリスが大拙とともに大谷大学教授に就任してからは、大学内に東方仏教徒協会 *The Eastern Buddhist Society* を設立すると同時に、大乘仏教と禅を主領域とする英文仏教雑誌 *The Eastern Buddhist* を創刊して大拙と共同で編集に携わった。ビアトリスも論文の寄稿を重ね、*The Eastern Buddhist* 誌は広く世界で永続的に読まれるようになり、禅と大乘仏教への道を世界に向けて開いたのである。

さて、ビアトリスの宗教思想の基盤には神智学 (*Theosophy*) が存在していた。ビアトリスはアメリカで神智学を涉猟し、来日後も神智学との関わりは続いていた。吉永によれば、アメリカの神智学徒数は最盛期でさえ 1 万人を越えなかったにも関わらず、秘教思想である神智学の最も重要な貢献は、教会外のアメリカ人の形而上的語彙に東洋思想を結びつけたことである<sup>21)</sup>。それでは、ビアトリスがそのような神智学に関わった立脚点を近代仏教史から手短かにみておこう。

吉永進一著『神智学と仏教』(2021)<sup>22)</sup>によれば、神智学は欧米の近代仏教史において、アジアの仏教教団が直接布教伝道を行う前の初期仏教史(19世紀末から第二次大戦)に登場した。神智学協会の創始者はブラヴァツキー (*Helena Petrovna Blavatsky* : 1831-1891) である。ブラヴァツキーの神智学は、チベットのマハトマ(大聖)から伝授されたという触れ込みで「仏教」を称した。もとより神智学は、万教同根説をとり、原理的にはすべての宗教を等しく評価しながら、仏教の評価は高かった。そしてブラヴァツキーと初代神智学協会会長オルコット (*Henry Steel Olcott* : 1832-1907) の二人はスリランカで 1880 年

に受戒しているのです、形式的には仏教徒であったことから、神智学と仏教とは双方向の深いつながりが生まれました。ここで神智学協会の三つの目的（1887年改訂）を記しておこう。第一は人類の普遍的同胞愛、第二は東洋の文学・宗教・科学の研究促進、第三は自然の謎の法則と人間の心霊能力の探求である。初期の仏教シンパの抱いていた仏教（神智学あるいはダーサの「仏教」<sup>23)</sup>）はハイブリッド化しつつあったが、日本仏教徒たちの仏教も明治維新以降、急速にハイブリッド化した。アメリカで一般市民への英語講演を行い、仏教伝道（臨済宗）を行ったのは、1892（明治 25）年に渡米した平井金三（1859-1916）であった。積宗演が演説を行った万国宗教会議が 1893（明治 26）年にシカゴで開催されたのも、日本において仏教再興機運の高まりがあったからである。

仏教再興機運の高まった時期は、ビアトリスがアメリカで神智学や小乗仏教を涉猟した時期に重なっている。ビアトリスと神智学との関係の始まりと発展の方向を確認しておこう。ビアトリスがラドクリフ・カレッジ在学の頃、義父ハーンからビアトリスへの手紙（1898年2月）に記された内容（母エマの神智学熱や菜食主義）から、エマが熱心な神智学徒であったこと、エマとビアトリスの菜食主義は神智学経由であったことが明らかになっている<sup>24)</sup>。少なくとも1898（明治 31）年以降のビアトリスはエマと神智学を分かち合うようになっている。エマは1916（大正 5）年に来日以後、80歳で没するまで大拙夫妻と居を共にし、1920（大正 9）年に結成した神智学協会東京インターナショナル・ロッジにも会員として参加している。このような経緯のもと、ビアトリスと神智学との関係は続いていた。大拙夫妻が大谷大学に職を得て京都に移ることになり、二人は大乗ロッジを大谷大学内に設立した。設立のため、ビアトリスは1924（大正 13）年に神智学協会アディヤール（Theosophical Society Adyal）本部の認可を受けている。このロッジには、大拙の人脈もあって欧米仏教シンパが集

まることになったのである。

神智学は仏教と不離の関係にあったといえよう。今 日出海（初代文化庁長官：1903-1984）による「大拙先生御夫妻」の逸話には、ビアトリスの靈性が「神智学と仏教の間を行き来して」成立している状態がまざまざと見える。今は、東京インターナショナル・ロッジの運営において中心的役割を果たした、Captain Kon（日本郵船の船長であった）こと父・武平の思い出を話している。当時の日本における神智学の普及をみることができる話であり、やや長くなるが、引用する。「父は 30 歳を過ぎるまでクリスチャンで、生涯酒も飲まず、煙草も吸わず、甚だ謹厳な人で、暇さえあれば読書をしていた。……ロンドンでセオソフィの話聞いて興味を引いた、……父は爾来セオソフィの研究に没頭した。……鈴木大拙夫人ビアトリス女史がセオソフィの研究者であることを知り、鎌倉を訪ねたり、……親交を結ぶようになった。……（いつも大拙と議論していた）父は純粹にセオソフィストの立場で仏教を見るという具合だった。（大拙と今が議論している間は）夫人が二人の間に立って両説を中和する役割を演じている風であった。二人は議論こそすれ、北鎌倉へはよく招かれていた」<sup>25)</sup>と。そして、これらの思い出から今は次のように言う、「セオソフィはあらゆる宗教の教義に通じていなければならず、殊に仏教の知識なくしては理解しにくい」<sup>26)</sup>と。

### 第 3 節 高野山での真言密教修学（1920—1930 年代）

1920 年代はビアトリスにとって神智学運動に熱心な時期であった。特に京都で 1924（大正 13）年に結成した大乘ロッジでは書記役も務め、会の運営と協会との連絡にあたっていた。クリシュナムルティ（Jiddu Krishnamurti : 1895-1986）を来るべき世界の教師、マイトレーヤとして崇拜するクリシュナムルティ運動や「東方の星結社（Order of the Star in the East）」運動に熱心であっ

た<sup>27)</sup> (星結社運動については、鈴木貞太郎編『星教団』日本星教団代表者 鈴木ビアトリスがある)。しかし、日本人加入者はほとんどおらず、神智学運動は停滞してしまう (1929年にクリシュナムリティが「真理へ至る決まった道はない」とメシア否定をし、1930年代以後、人智学やヨガナンダなどのポスト神智学的秘教思想の新しい波が明らかになっていった)<sup>28)</sup>。アディヤールの神智学協会へは「日本には弘法大師や親鸞聖人などの偉大な教師がいるので、神智学や「星の結社」に関心をもつ必要がなく、そのため神智学は広まらない」<sup>29)</sup>と連絡している。1930年代には大乘ロッジの活動は実質的に停止した。ロッジ活動低迷にしたがい、ビアトリスは高野山での研究を本格化させるようになった。密教的伝統を発見したビアトリスは、*Theosophist* 誌に *The Holy Mountain : Koya San* と題する記事を寄稿(1937年1月)している。ビアトリスは弘法大師について次のように述べている (カッコ内和訳は引用者による)。

Kobo Daishi himself is considered by many to be an *earthly manifestation of Maitreya*, or Miroku as he is called in Japanese.<sup>30)</sup>

(多くの人々が弘法大師本人を「マイトレーヤの地上的顕現」とみなしている。マイトレーヤは日本語で弥勒と呼ばれる)

上記の英文からはビアトリスが崇拝したクリシュナムルティを連想させる。ここでは、弘法大師をイタリック体で「マイトレーヤの地上的顕現」と謳いあげている。

ビアトリスは元来神智学やインド神秘宗教に関心をもっていたので、日本で大乘仏教の実際に触れ、殊に京都に移ってからは深く密教に親近していったのである。ビアトリスは本格的な高野山滞在以前、数年にわたって京都で真言密

教を学んでいた。1924（大正13）年に真言宗の東寺で密教を学べるように、大拙が東寺に依頼し、その際の通訳は英文学者の寿岳文章（1900-1992）が行った。禅と密教とは表裏相通ずるものがあるが、ビアトリスを惹きつけた。つまり、「無一物中無尽蔵」が「無一物」において経験される時禅の空円相になり、「無尽蔵」において経験される時密教の曼陀羅になる<sup>31)</sup>。大拙の「禅」空間はビアトリスの密教を悠々と受け入れていた。1925（大正14）年12月松永昇道阿闍梨（時の東寺派管長）によって正式に密教の弟子となり、密教研究と修行の道場を高野山に求めた。だが、大拙との結婚以前から傾いていた神智学への関心は、密教に触れて後もビアトリスからすぐには消えなかった。1927（昭和2）年以降、10年にわたって毎夏必ず長期に独りで高野山に籠って密教に深く入るにつれて、高野山の山の深さと静寂のうちに次第に密教に吸収されていった。

高野山修学の成果に関して、1936年に *KōYA SAN : The Home of Kōbō Daishi and His Shingon Doctrine* というパンフレットが出版された。Shingon Doctrine（『真言教説』）の真言密教の基本的教義を解説する項目において、ビアトリスの修学の成果と神秘主義への関心がよく現れている。Shingon Doctrine は *The Young East* 誌に寄稿（1931年）されているもので、さらに *Impressions of Mahayana Buddhism*（1940年）と遺稿集『青蓮仏教小観』（1940年）にも所収されている。それでは、『青蓮仏教小観』所収の「大乘真言教説」の概要をみていこう。

大乘真言宗教義では真言宗の系譜が紹介された後、仏心と衆生心はひとつであることを意味する「不二一心」を説く根本経典として『大日経』と『金剛頂経』が挙げられ、不二一心の絵的表現として曼陀羅にビアトリスは言及する。

「曼陀羅、全宇宙に遍満している無限の仏陀の体・声・思想を書いたものであります。これは宇宙の万物を、その中に含んでおります。仏や諸菩薩は、正覚

の状態を示現し、曼陀羅全体は、法身の説法と救済を表象しております。……真言によれば、衆生は宇宙一切のものと同様に、六大から出ております。六大とは地・水・火・風・空・識であります」と説いている。そして法身との一体化を実現するため三密（身・口・意）実践と真言信徒の五大願、真言密教の理想である『即身成仏』を説く。「即身成仏とは自らの身体において仏の境地を実現することであり、自身に内在する法身と一体になることが実現される時、真理は知られ、苦悩は終息する」<sup>32)</sup>と結んでいる。

ビアトリスは修行体験から弘法大師（空海：774-835）を深く景仰し、弘法大師修行の地である高野山を「宗教と芸術と自然が聖巖と美と平和の雰囲気を構成して」<sup>33)</sup>いると称えた（さらに、ビアトリスは高野山で多くの詩を作った。大拙は、それらのいくつかを『青蓮仏教小観』に収めている）。高野山に毎年訪れた理由の一つに、「地上の浄土に来たかのように感ずる」<sup>34)</sup>霊場・高野山にビアトリスの心は大いに惹かれたということがある。ビアトリスは真言密教教義の研究に死没までの十数年を傾注したことから、真言密教の教えがビアトリスに深く浸透していたことが分かる。ビアトリスにとって真言密教は、アメリカ時代に始まった探求の延長線上に位置するものであり、「仏教生活の実践」の拠り所であった。さらには自らの身体において仏の境地を実現し、覆いを取り払って自身に潜在する法身と一体になることであり、これこそが真実あるがままに知る「悟り」であった。

ビアトリスは「大乘真言教説」の中で「不二一心」について補足している。「不二一心とは宇宙には二心三心あるのではなく、只一心あるのみで、智慧と慈悲の両面があり、大乘仏教の見解は皆これに基礎を置いている。そして真言では『大日経』が慈悲、『金剛頂経』が智慧である」<sup>35)</sup>と強調している。

#### 第4節 動物愛護等の宣布（1928-1938年）：仏教雑誌寄稿、講演等を通して

ビアトリスは日本の動物愛護に関する問題意識について *The Young East* 誌に寄稿している（1937年）。そこでは「仏教では、至る所に、動物をいたわれ、と云う事柄が見えております。然るに日本は、主として仏教国でありながら、動物を優しく取り扱う点では、他の諸外国に劣っているのは嘆かわしいことでもあります。けれども、これは無慈悲な為ではなく、人々の考えが足りない所から来ているものようでもあります」<sup>36)</sup>と述べている。さらに浄土真宗本願寺派僧侶で京都大乘ロッジのメンバーの宇津木二秀（1893-1951）にあてた手紙（1933年）で「神智学徒として動物の保護に熱心になるべきだ」<sup>37)</sup>と述べている。この動物愛護論においても神智学思想や大乘仏教思想が交錯しているが、ビアトリスを含む欧米神智学徒の多くにとって、ブッダの教えを学び実践すること、神智学徒の間に境界は存在せず、両者の教えは同一、あるいは両立が可能であった。この神智学と仏教との関係は、ビアトリスの靈性の形成を理解するにあたって重要な書簡である<sup>38)</sup>。

ビアトリスが世に出した動物愛護論の、最も早い段階のものが1932年10月22日に名古屋の信道会館で行った講演“*Buddhism and Practical Life*”の中に含まれている<sup>39)</sup>。この英語原文は *Impressions of Mahayana Buddhism*（1940年）に収められ、*The Eastern Buddhist Society* から刊行されている。ビアトリスにとって、動物愛護思想は菩薩の思想であると強調している。この点については、第4項で述べていく。

大拙は、ビアトリスの業績における重要な位置に動物愛護があると考えていた。大拙は『青蓮仏教小観』の「はしがきと思い出」の中で、「亡妻は動物愛護のため、鎌倉に慈悲園なるものを経営して、自分相応の力で、訴える途なき動

物の保護に従事した。仏教に縁深き日本人が、割合に動物を虐待して少しも怪しまぬ風習のあるのに対して、亡妻は一種の憤りさえも感じていた」<sup>40)</sup>と語っている。ビアトリスの内には動物愛護活動の契機として生命の畏敬という仏教思想が根付いていた。この生命の畏敬を中心に据えるビアトリスの動物愛護思想は、1928年から亡くなる1年前の1938年まで10年間続いた。愛護思想普及活動として、まず国内外の英文誌に掲載されたビアトリスの動物愛護記事を見てみよう。以下の記事や寄稿文は『青蓮仏教小観』にも収載されているものであり、「日本における愛護事業」(1935年)、「基督教の菩薩」(1937年)、「動物愛護の趣旨」(1937年)の重要な部分を引用する。*Impressions of Mahayana Buddhism* には”Reverence For Life”が、『青蓮仏教小観』には「生命の尊重」が収載されている。

### 第1項 The Animals' Champion 寄稿

The Animals' Champion はロンドンの動物保護と生体解剖に反対する世界連合(The organ of the World League against Vivisection and for the Protection of Animals)が発行していたニュースレターである。1935年、9-11号の巻頭にビアトリスの報告記事”Humane Work in Japan”が掲載された。この記事の日本語版「日本に於ける愛護事業(『青蓮仏教小観』所収)」<sup>41)</sup>において、「日本人の心の中には、動物を憐れんだ聖徳大師の教えがある」<sup>42)</sup>という見解に始まり、「しかしながら、現在、日本で動物が残酷に扱われている、その状況を変えるための世論を呼びおこし、善い例を示していくことが必要だ」<sup>43)</sup>と述べ、彼女自身が組織した大谷大学内の動物愛護会(Animal Welfare in Japan)と慈悲園の活動について報告している。大拙が『青蓮仏教小観』に加えたのは、ビアトリスと海外の団体との連携ぶりを示していたからである。さらに、その

報告の中にある興味深い記事がある。以下の一文において、ビアトリスの動物愛護会が「極東で世界初」と強調するため、*first* とイタリック体で書かれている。

“This is the *first* Animal Welfare Society formed in the Far East”<sup>44)</sup>

(これは極東で最初の動物愛護会であります)

ビアトリスは、慈悲園での動物たちの世話だけでなく、「将来人の教師になり指導者となるべき学生に動物の権利について如何に考えるべきかを教える」<sup>45)</sup> ことも行っていた。ビアトリスは積極的に独特な実践による慈悲行に情熱を込めただけでなく、教育・文筆においても動物への慈悲行の精神を説いたのである。

## 第2項 The Young East 寄稿

雑誌 *The Young East* は日本で 1925 年に刊行された英文仏教雑誌（季刊）である。ビアトリスが大拙と創刊した *The Eastern Buddhist* の誌上においても、最新の仏教思想、東洋文化研究の流れを示すものだ、ビアトリスがその発刊を大きく取り扱い宣伝している。*The Young East* は、西本願寺系の仏教改革運動（目的：禁酒と仏教徒の綱紀粛正）から生まれた反省会および『反省会雑誌』の中心人物であった、インド学者の高楠順次郎、ジャーナリストの桜井義肇らが主宰し、日本の仏教と日本の若者を主眼としていた<sup>46)</sup>。

ビアトリスと大拙夫妻の *The Eastern Buddhist* 掲載論文の内容が、学術的な仏教研究を扱っていたのに対し、*The Young East* は、国内外の政治情勢を解説する記事や、グローバルな仏教研究情勢に関する最新の話題、論争をとりあげていた<sup>46)</sup>。彼女の動物愛護等の問題意識が *The Young East* の趣旨に合致し

ているとみたのか、1930年代なかばにビアトリスは *The Young East* に多くの論考を寄稿している。その一つ、「基督教の菩薩」<sup>47)</sup>(“Albert Schweitzer: A Christian Bodhisattva”)<sup>48)</sup>ではキリスト教思想と仏教思想の比較を行っている。「基督教の菩薩」の中で、「アルバート・シュワイツァーは、人間がその人生に意味を与える事のできる方法は世界との自然的関係を高めて、靈的關係のものとする事であると信じて居る。そしてこの事は、自分は自身の為のみに生きるのではなくて、菩薩の如くすべての生命と自己が一つであると感じることによって成し遂げられるものである」<sup>49)</sup>と書いている。さらに続けて「シュワイツァー自身、キリスト教の弱点と誤りから離れ切っていない」としながらも、「シュワイツァーの思想と感情は全く仏教的であり、彼をキリスト教の菩薩と呼ぶ」と論じている<sup>50)</sup>。

次にビアトリスが *The Young East* に寄稿した「動物愛護の趣旨」<sup>51)</sup>(“A plea for Animal Welfare”<sup>52)</sup>)では大乘仏教の教えとして、万物一体の思想に触れて一元論的自然観を論じている。以下は、ビアトリスによる英語原文、杉平/横川による日本語対応訳である。

All forms of life are One and all are manifestations of that One. How can we ourselves obtain happiness and joy if we are cruel to other forms which are really expressions of the One Life and the One Light. Even the humblest creature has its place in the divine architecture of the universe. Let us then help not to destroy but to build both for them and for ourselves a House of Joy of which Compassion and Love are the foundations.<sup>53)</sup>

(あらゆる生物は一であり一切はその『一』の表現であります。若しも 実際に

その一なる生命、一なる光明の表現である他の生物に冷酷でありますならば、どうして私達は幸福や喜びを得ることができましょう。最も卑しいものと見られる動物でさえ、宇宙の聖なる建物を構成する一部であります。そこで私たちは、破壊するのではなく建設にいそしみ、動物の為、私たち自身の為に、慈悲と愛とを基礎とする歓喜の家を造ることに努力しようではありませんか)<sup>54)</sup>。

今日 21 世紀のキリスト教神学では、自然界の万物を神の被造物として同等なものとする見地から環境問題を考え、人間には自然を保護する責任があるという解釈が有力である。しかし、19 世紀から 20 世紀前半のアメリカのキリスト教会において、このような考えは少数派だった。一方、ビアトリスの考えは一見、東洋的であり仏教的に見えるが、聖なる建物の比喩を使って万物一体を説明する部分には、西洋思想の影響が感じられる<sup>55)</sup>。ビアトリスの愛護思想の考えには折衷的とか、仏教的（あるいは神智学的）なものどキリスト教的なものが渾然一体となっている<sup>56)</sup>と評されるにしても、彼女の **One Life** という仏教思想のなりたちを理解するうえで重要な文章である。

### 第 3 項 The Aryan Path 寄稿

雑誌 **The Aryan Path** はインドのボンベイとロンドンに拠点をもっていた月刊誌で 1930 年から 1960 年まで続いた。**The Aryan Path** は、東洋思想や神秘主義関係の論考のみならず、当時の社会情勢や政治に関する論考も多く掲載された（この雑誌の編集方針は、**pacifist** すなわち平和主義を貫くというものであった）。ビアトリス最晩年の寄稿文である「生命の尊重」<sup>57)</sup>（“**Reverence for Life**” 1938<sup>58)</sup>）で、シュワイツァーの功績に言及し、「シュワイツァーにとって、義務とは『すべての生きる者に対する限りなき責任』である、彼の思想や実際活動

に於いて彼は、菩薩衆の中に加わっている」<sup>59)</sup>と論じている。ビアトリスによってシュワイツァーが「菩薩」に属すとする理由は「菩薩はあらゆる生物と自分とは一つであると感じ、それを助ける為にあらゆる方法を盡す」<sup>60)</sup>というものである。これを根拠としてビアトリスは次のように主張する。ビアトリスによる英語論文と杉平/横川による日本語対応訳は以下である。

The problems of vivisection and killing for sport, meat-eating, wearing furs, etc., would adjust themselves if men would practice true compassion and revere life because all are one. *The question is not whether man shall be the master of the earth but what kind of a master, cruel and selfish or compassionate and responsible?*<sup>61)</sup>

(生体解剖をしたり、慰みに殺生したり、肉食したり、毛皮を着たりすることなどは、もし人が本当に慈悲を行うすべてのものが一つであると考え、すべての生命を尊重することになれば、自然に解決のつく事なのであります。問題は人間が果して地上の主であるか否かという事ではなくて、むしろ如何なる種類の支配者であるか、残酷で、利己的なものであるか、それとも思い遣りのある、是非を弁別する事のできるものであるか、どうかという事であります)<sup>62)</sup>。

すべての生命を尊重すること、動物も人間も同じように尊重することは、子どもや年老いた人々、貧しい人々に同情し、助けることにつながる、と論じたのである。この論考が寄稿された1938年3月の後、同年5月にビアトリスは病で入院し、1939年7月に世を去った。ビアトリスの生命尊重思想は、次の文章にみられるように、周囲の戦火を危惧して平和への強い願いにつながっていると解釈できる。ビアトリスによる英語原文、日本語対応訳は杉平/横川によ

るものを以下に引用する。

But how seldom we find respect for animal life! In my opinion this Reverence for life is what we need most to cultivate, for faithfully practiced it would put an end to war to the exploitation of both men and animals. <sup>63)</sup>

(しかしながら、動物に対する尊重は殆どないではありませんか。私の考えでは、此の方面の生命尊重こそ大いに培って行かねばならぬものであると、思うのであります。忠実にそれを行っていったなら、戦争もなくなることでありましょうし、人間と動物とを不当に利用することも無くなることでありましょう)<sup>64)</sup>。

#### 第4項 講演啓蒙活動

ビアトリスは国内において慈悲心に基づいた動物愛護についての啓蒙講演を行っている。講演の内容は『仏教と實際生活』で、英語原題名は“Buddhism and Practical Life”<sup>65)</sup>である。

ビアトリスの講演における重要な箇所は以下である。(和訳は引用者による)

When we ourselves are restored to the wisdom, we realize that we are all one in the Dharmakaya...<sup>66)</sup>

(菩薩の思想に立ち返るとき、私たちは、私たちすべてが法身の中にひとつであることを覚る)<sup>67)</sup>

ビアトリスは上記のように述べて、(第2節第2項で紹介したように)大乘仏教

に彼女が見出した **One Life** 思想をたたえたいうえで、彼女が見た同時代の日本では、動物が残虐に扱われているのは嘆かわしい、特に子どもたちには動物を大切にすること(慈悲心を養うこと)を教えなければならない、と指摘する。

講演におけるビアトリスの主張の要点は、普賢菩薩を手本として生きる道を説く中で、仏教では動物を人間と同じように大切に考える、と述べた。以下はビアトリスによる英語原文と杉平/横川による日本語対応訳である。

In Buddhism only do we find the doctrine that animals as well as human beings are manifestations of the One Absolute Reality and that they are one with us partaking of the nature of the One Absolute Reality and that in time they will attain enlightenment even as we.<sup>68)</sup>

(仏教においてのみ、動物が、人間と同じように、唯一の絶対的実在間と動物は同じ、唯一の絶対的実在(仏)の顕現であり、その実在の性質(仏性)を具備しているという点で私たちと同格であり、そうして、やがて動物も私たちと同様に正覚の位に入るであろうという教えが示されているのであります)<sup>69)</sup>

ここで、ビアトリスの主張の重要な点は、(1)人間と動物は同じ **One Absolute Reality** の顕れだという教義を持つ宗教は仏教だけである、(2)人間と動物は **the nature of One Absolute Reality** (その実在の性質(仏性))を共にし、ひとつである、という。これを根拠として、動物の虐待や搾取に反対したのである。次にビアトリスのいう仏性について述べていこう。

In the *Saddharmapundarika* we are told that animals and plants, even the dust beneath our feet, contain the germ of Buddhahood.<sup>70)</sup>

（『法華經』にはこういう事が書いてあると覚えております。これは動物でも、植物でも、私たちの足下の土でさえも、みんな仏性を具えている（草木国土、有情無情、悉皆成仏）というのでございます）<sup>71)</sup>

上記の文では the germ of Buddhahood が「仏性」であり、ビアトリスの単著 *Mahayana Buddhism* (Buddhism in England 誌) の中では、専門用語をできるだけ避け、大乘仏教の精神を提供する本とする目的で、Buddha-nature という語を用いるようになる。そしてビアトリスは動物を大切にすることが仏教徒としてのわれわれの義務である、と明言している。

高崎直道（仏教学者・僧侶：1926－2013）によれば、仏性は如来蔵とまったく同じであるという。「わが国の仏教の基調は平安初期、最澄による天台宗の開教によって決定されたものと見なしてよい、一切皆成という一乗思想は『法華經』に由来するが、もう一つは『涅槃經』にいう「一切衆生、悉有仏性」の教説がある。この教説は、鎌倉新仏教の導火線となっていき、そこにいう「仏性」が「如来蔵」にほかならない。「仏性」(buddha-dhātu) とは仏の本質であり、すべての衆生には仏と同じ本性があり、それが衆生の将来における成仏を可能ならしめている」<sup>72)</sup>と、書いている。ここで説明される仏性は「だれでも(人)が仏になれる」という基本が説かれている。

ビアトリスの動物愛護に関する「一切衆生」が含むものについて、仏教の基本をビアトリスならではのユニークな論述に発展させたもので、「一方的すぎる感がある」、と日沖（宗教学者）はいう。ともあれ、ビアトリスが大乘仏教に「心を奪われた」のは仏性の教えに出会ったこと<sup>73)</sup>である。ゆえにビアトリスの動物愛護の慈悲園は、ビアトリスの仏性理解「一切衆生悉有仏性」に基づいていることは確かである。

信道会館で講演を行った 1932 年頃、ビアトリスの動物愛護活動は大乗仏教的理想のみに基づいていたのかについては、興味深いビアトリス直筆の手紙がある。現実社会への抗議の必要性を訴えるもので、宇津木二秀（浄土真宗本願寺派僧侶：1893–1951）にあてて書いた 1933 年 3 月 22 日付けの手紙がある。ビアトリスは神智学徒としての意識を強く持ち、それを動物愛護運動と関連づけていたことを裏付ける。以下にビアトリスの英文書簡の一部と日沖の対応訳をみてみよう。

I enclose a circular relating to terrible experiments on dogs going on in Europe. .... I should be so very glad if you would write a letter of protest to the Federation. Do please do this. As Theosophists we ought to take a stand against this terrible cruelty.<sup>74)</sup>

（ヨーロッパで行われている、犬へのおぞましい実験に関するチラシを同封します。……あなたがこの連盟に対して抗議の手紙を書いてくれたら、本当にありがたいです。どうかそうしてください。神智学徒として、私たちはこの恐ろしい残虐行為に抵抗しなければなりません。：日沖直子訳）<sup>75)</sup>

宇津木は 1924 年に設立された大乗ロッジで、ビアトリスとともに運営や会計の任にあった人物である。しかし、1930 年代にはいるとロッジは実質的に消滅していた。ビアトリスからの手紙を受け取った 1933 年頃の宇津木はアメリカから帰国し、西本願寺系の相愛女子専門学校で教鞭をとっていた。さらに 1936 年には西本願寺翻訳課主事に就任していたことからみて、宇津木は仏教徒とみられるべきところであろうが、少なくともビアトリスは彼を神智学徒とみていた。ビアトリスにとって、神智学徒と仏教徒であることの間に境界はなく、

それらは完全に両立していたことが、上記の書簡からうかがわれる。

大拙はビアトリスの愛護活動について、「動物に対する愛愍の情は本当に仏教的であった。……なんとか天然の死を遂げるまでは、助けてやりたいというので途中不幸な犬猫を見ると、何とかしてこれを家までもってこなくては気がすまなかった」<sup>76)</sup>と言って、ビアトリスの独特な動物愛護実践による慈悲行は彼女の業績の一つであると称えている。

## 第5項 動物愛護慈悲園設立と実践

次に動物愛護設立の経緯をみていこう。ビアトリスは、1929年（昭和4）年夏、鎌倉の円覚寺小伝庵（夫妻の住居）に慈悲園という動物保護施設（英語名：The Burnett Animal Mercy Shelter）が開設された。この慈悲園はビアトリスと鈴木家の家政婦による二人だけの献身的活躍のおかげで運営が成り立っていた。施設の資金面は常に厳しい状況にあった。主な出資者は在日アメリカ外交官の夫人フランシス・バーネット（Frances Hawkes Cameron Burnett: 1884-1957）である。日本における動物愛護活動はビアトリスによる慈悲園開設の前後、二つの組織が設立されていた。一つは、ビアトリスが来日する約10年前、1902（明治35）年に日本人著名仏教者（島地黙雷や大内青巒）が発起人となって創立した動物虐待防止会（動物愛護会）である。もう一つがバーネット大佐夫人をはじめ、新渡戸稲造夫人マリー（Mary Patterson Elkinton Nitobe: 1857-1938）などの在日外国人女性を中心となって1915（大正4）年に創立した日本人道会である。これら二つの組織と慈悲園との関係がどのようであったか、ビアトリスによる資料の多くは未発見の状況で、明らかにされていない。ともあれ、1914（大正3）年、ビアトリスは憐れみの感情から、自宅で捨て犬や捨て猫を養っていたが数が増えてきており、大拙夫妻の間で問

題となっていたところ、バーネット夫人からの資金面での支援があつて慈悲園が実現したのであった。慈悲園の活動は駐日外国人女性グループの支援に得て始まったが、家族的運営にとどまり、政治的運動に結びつかなかった。ビアトリスは慈悲園設立と実践は、mercy（慈悲）という菩薩の慈悲から生まれていると言ひ、動物愛護運動の思想的裏付けとして一元論を奉じた。それはビアトリスの言葉によれば、大乘仏教の思想にほかならないのである<sup>75)</sup>。

ビアトリスは1934（昭和9）年のラジオ放送による講演（radio talk）を行っている。その講演要旨は1936年、『英国仏教』誌に” Buddhism and Women”<sup>76)</sup>として掲載された。講演内容の一部（ビアトリスによる英語原文、杉平/横川による日本語対応訳）をみてみよう。

I want to say a word about animal welfare. Kindness to animals is often talked about more than practiced. It is important in these days that animal welfare should be considered both from the theoretical and practical points of view, and above all, that example should play its strong part, and here women can do so much by practicing kindness and compassion to helpless animals and teaching their children to do so.<sup>77)</sup>

（ここで動物愛護について一言したいと思います。動物愛護の声はかなり喧しく伝えられていますが、その実行的方面は疎かにされております。動物愛護は理論と実践の両方面から考えられるべきで、その実行は女性が率先して為すべきと考えられます。殊に母が其の子を教育する際には、深く心をここに用いるべきでありましょう）<sup>78)</sup>

19世紀末から20世紀初頭にかけて、欧米、特にイギリスにおける動物虐待

防止運動の中心には神智学徒であり、フェミニスト、さらには政治活動家である女性たちがいたことを考えれば、ビアトリスの慈悲園設立と実践活動には神智学からの影響があったとみることもできる。しかし、先述したようにビアトリスの靈性は最終的に大乘仏教の思想に依拠しているといえよう。ビアトリスなりの「仏教的」一元的自然観と生物観を提示したことは注目すべきところである。彼女は文筆活動・講演活動を通して動物愛護活動を社会的・学術的に発展させていったのである。

ビアトリスの動物愛護への取り組みの進展については、バーネット夫人からの支援に始まり、大拙をも巻き込みながら活動が進展するうちに、動物愛護会・人道会といった派閥から自由になり、動物の保護と仏教の教えを結びつけるようになった。

## 第5節 ビアトリスによる靈性論

ビアトリスは晩年になって高野山・密教修学に傾注した。弘法大師を景仰し、大師の教えはとりわけ強くビアトリスの奥深くに入り込んだ。彼女の中心思想は弘法大師の「即身成仏」思想である。「即身成仏」とは、この身のままで悟りをひらいて仏となることであって、これが密教では修行によって実現をめざす目的である。一般に大乘仏教では世界の本質を「空」として捉えるのに対し、密教では物質および精神の具体的・現象的事実の世界がそのまま根源的原理として認められ、それが大日如来の法身とされる。人間の自我もそのような世界であり、初めから本来的に仏そのものである。修行とはそれを自覚していく過程である。ビアトリスは来日後、東洋思想の禅と大乘仏教の道に入り、靈性の高みを目指して自らを投入した。そして密教修学と修行のなかで菩薩身を現じ、法身の境地「さとり」に至ったのである。

ビアトリスは『青蓮仏教小観』所収の「大乘仏教における菩薩の位置」、「大乘仏教に於ける菩薩の理想」と「普賢の願に就いて」において、弘法大師の教えを著わしているので、重要な箇所を引用し、彼女の靈性を描き出していこう。

## 第1項 菩薩思想

大乘仏教のなかでも、宗派によって尊崇する仏の形は異なっている。とりわけビアトリスが信仰した普賢菩薩、象徴的意味においては宗教的瞑想を表す菩薩である。普賢菩薩の本質とは、遍く一切のものに及ぶ偉大で慈悲深い慈しみを表す。普賢菩薩の慈悲とは「菩薩は衆生の利益のために自分の積み重ねた功德を衆生に廻施し、崇高なる仁慈の念から涅槃を捨てて、繰り返し繰り返し、此の苦の娑婆に還り来って、衆生を救おうとされる。普賢菩薩の願は是を表す」<sup>79)</sup>のである。菩薩の理想は崇高なる理想であり、これを表す普賢菩薩の願いにビアトリスの心は動かされ、靈性を自覚し、目覚めたのである。そして、次のように語る。「大乘にあつては、菩薩は實際慈悲の王であり、その慈悲とは謙遜・服従・迅速な奉仕・慈悲・優しい愛情の優れた徳であります。国と国との戦、個人間の私たちが慈悲を行えば、国家間戦争、個人間の憎悪は、皆が慈悲を行わずれば、なくなるであります。……それから人間が動物に蒙らしめているような残忍刻薄の行為も、慈悲が正しく理解され、行ぜられていけば、ありえぬことでしょう。……」<sup>80)</sup>と。全生命の尊重と平和を願う靈性の地平に眼差しを向けるのであった。

## 第2項 菩薩としての慈悲の実践

大谷大学でビアトリスが英語を教えた学生の小堀南嶺は、ビアトリスを菩薩の権化とみて実によく言い表している。まず小堀は、ビアトリスの「大乘仏教

と魅力」と題する一文を引用している。その引用部分には「大乘の教えは、自己のみの「さとり」を目的とする阿羅漢や、そこに究極の目的をおく独覺の教えを説くのではなく、菩薩の教えを説くのであります……この菩薩の原理こそ大乘教の真髓であり中核であります」<sup>81)</sup>とある。この部分を受けて小堀は次のように言っている。「女性としてのビアトリス先生は大乘仏教の菩薩の思想に最も深く心を動かされた。その仏教の理解は、存在の根底に徹見する智に止まらず、それが大悲に出てくる感情に集中されている。個の存在が根底において一切衆生に連なる無限のひろがりに目覚め、一切衆生を、猫も犬も草も花もみな自分と見る愛情である。40歳以後の20年程は厳密な菜食主義者であった夫人は同時に大変な動物愛護者であった。それは何れも生命の尊さを深く知る夫人の慈悲の行為であった」<sup>82)</sup>と語っている。

菩薩思想実践活動の一つにあげられる、ビアトリスが行った講演『仏教と實際生活』の中から以下の文章を引用しておきたい。子どもへの生命尊重教育の必要性に言及している点が優れて先見的である。加えて、菩薩の愛と慈悲を教えなければならぬというビアトリスの強い思いがみてとれる。以下はビアトリスによる英語原文と杉平/横川による日本語対応訳である。

What are some of the ways in which we can work to forward the movement for animal welfare? First of all, by creating public opinion which is done by speaking in their behalf upon every possible occasion that presents itself. ....The most important of all is the humane education of children. .... Why can't primary school teachers instruct their little pupils to love and revere all life? <sup>83)</sup>

(動物愛護の運動をすすめるには一体どうしたらいいでしょうか？まず、第一に

機会あるごとに動物の幸福の為に、言論によって世論を喚起することでありませぬ。次には、自身がどんな意味でも決して動物を酷使しないように誓って、之を実行することです。……最も肝要なことは、子どもの慈悲心を養うことです。……何故に小学校の先生は、幼い児童に一切のものの生命を尊ぶことを教えないのでしょうか?)<sup>84)</sup>

## おわりに

大拙によるビアトリスの慈悲の実践についての回想を再度記しておこう。大拙は、ビアトリスの動物への愛愍の情を「本当に仏教的」であった、と言っている。この仏教的動物への愛着は徹底した菜食主義につながっていた。「彼女の病が次第に重くなって、体力頗る衰え行くのを見て、肉汁でも摂取したらと勧め」たが、「固より決然としてその勧告を退けた<sup>85)</sup>」と述懐している。

本論文ではビアトリスの靈性にいたる道程と靈性の内容についてみてきたが、彼女の靈性をより普遍的視点から捉えるには、次のような研究が必要であろう。まずビアトリスが西洋人による仏教実践の先駆者であること、女性と仏教というジェンダー研究、動物愛護、菜食主義など多方面からの調査・研究を行い、ビアトリスの靈性研究を完成させていくことが期待される。

## 註

- 1) 小堀南嶺「ビアトリス先生のこと」『鈴木大拙一人と思想一』岩波書店、1971年、184頁。小堀南嶺は大徳寺龍光院住職となっている。
- 2) 鈴木大拙「はしがきと思い出」『青蓮仏教小観』1940年、3頁。
- 3) 同上、13頁。
- 4) 上田閑照「三人の女性と大拙先生」『禅文化』禅文化研究所、1995年、50頁。

5) 同上、48 頁。

6) 同上、50 頁。

7) 同上、46 頁。

8) James. C. Dobbins 教授の最新研究「エマ・アースキン・レーン・ハーンの生涯（前編）」（松ヶ岡文庫研究年報 第 36 号、2022 年）によれば、ボストン市婚姻登録にはエマはニューイングランドの労働者階級の一般家庭の生まれとなっている。しかし、本論文では、従来通りの「イギリス貴族出身」と表記した。

9) 同上、105 頁。

10) 吉永進一「Beatrice Lane Suzuki 研究について（報告）」『松ヶ岡文庫研究年報』、32 号、2018 年、4-9 頁。

アメリカへの東洋宗教の伝播は、浄土真宗本願寺派が組織的な布教活動を開始するまでは、裕福なアメリカ人が東洋人宗教者を招き、自宅などに滞在させるという形で始まった。エマは 1902 年から東洋思想に傾倒していたので、宗教間対話を基調とした靈的サマートリートの活動に参加した。この時、エマが大拙を招待している。ビアトリスと大拙との出会いは、より正確にはエマ、ビアトリス、大拙の出会いであった。

11) 前掲書 2)、2 頁。

12) 前掲書 2)、2 頁。

13) 鈴木ビアトリス「大乘仏教の魅力」『青蓮仏教小観』1940 年、3 頁。

14) 前掲 4)、42 頁。

15) 前掲書 2)、8 頁。

16) 鈴木ビアトリス「円覚寺の禪」『青蓮仏教小観』1940 年、154 頁。

遺稿集『青蓮仏教小観』のなかには当時の禪経験から語るビアトリスの文章として「人生を照す光りとしての禪」、「禪の瞑想」、「禪寺の夏」、「円覚寺の禪」4 編がある。ビアトリスと親しかった大谷大学の杉平顕智と横川顕正の両氏によって和訳された。

17) 鈴木ピアトリス「仏教の印象 菩提心の教義」『青蓮仏教小観』1940年、161-162頁。

18) 同上、162頁。

19) 同上、29頁。

20) Beatrice Lane Suzuki, "Bodhisattva in Mahayana Buddhism", *Impressions of Mahayana Buddhism*, The Eastern Buddhist Society, 1940, p.30.

21) 吉永進一「序章 似て非なる他者」『神智学と仏教』法蔵館、2021年、13頁。

22) 同上、3-13頁。

23) 吉永進一「オルコット去りし後一世紀の変わり目における神智学と“新仏教徒”」『近代と仏教』41巻、2012年、80頁。「仏教の特質は実際の慈恵なることを論ず」において、フィランジ・ダーサの「仏教は虚無的、脱世間的」という批判に対して、古代インドの仏教者による病院建設を例にあげ、仏教の本質は世間に貢献することにあると主張している。

24) 吉永進一「高野山・密教関係のピアトリス資料について」『松ヶ岡文庫研究年報』34号、2020年、2-5頁。

25) 今日出海「大拙先生御夫妻」『鈴木大拙一人と思想一』岩波書店、1971年、415-417頁。

26) 同上、417頁。

27) 吉永進一「大拙夫妻と神智学」『松ヶ岡文庫研究年報』第33号、2019年、10頁

28) 同上、14頁

29) Adele Algeo, "Beatrice Lane Suzuki and Theosophy in Japan," *Theosophical History* vol.11 no.2 (2005) p.13.

30) Beatrice Lane Suzuki, "The Holy Mountain : Koya San", *Theosophist* vol.58 no.4, p341.

31) 上田閑照「三人の女性と大拙先生 第一回 鈴木ピアトリス夫人」『禅文化』禅文化研究所、1995年、51頁。

- 32) 鈴木ピアトリス「大乘真言教説」『青蓮仏教小観』1940年、93-94頁
- 33) 同上、90頁。
- 34) 前掲30)、51頁。
- 35) 前掲書31)、90-91頁。
- 36) 鈴木ピアトリス「動物愛護の趣旨」『青蓮仏教小観』1940年、234頁。
- 37) 日沖直子「鈴木ピアトリスの動物愛護論における仏教と神智学」松ヶ岡文庫研究年報34号、2020年、23-24頁。
- 38) 前掲書37)、28頁。
- 39) Beatrice Lane Suzuki, "Buddhism and Practical Life," *Impressions of Mahayana Buddhism*, The Eastern Buddhist, 1940, p.203.
- 40) 前掲書2)、3-4頁。
- 41) 鈴木ピアトリス「日本における愛護事業」『青蓮仏教小観』、1940年、241-242頁。
- 42) 同上、241頁。
- 43) 前掲書41)、241頁。
- 44) 日沖直子「鈴木ピアトリスと動物たち」松ヶ岡文庫研究年報、第33号、2019年、34頁。
- 45) 前掲書41)、241頁。
- 46) 前掲44)、35頁。
- 47) 鈴木ピアトリス「基督教の菩薩」『青蓮仏教小観』1940年、214-223頁(*The Young East*, 1937)。
- 48) Beatrice Lane Suzuki, "Albert Schweitzer: A Christian Bodhisattva", *Impressions of Mahayana Buddhism*, The Eastern Buddhist Society, 1940, pp.232-237.
- 49) 前掲48)、222頁。
- 50) 前掲48)、222頁

- 51) 鈴木ピアトリス「動物愛護の趣旨」『青蓮仏教小観』234-240 頁 (*The Young East*, 1937)
- 52) Beatrice Lane Suzuki, “A Plea for Animal Welfare”, *Impressions of Mahayana Buddhism*, The Eastern Buddhist Society, 1940, pp.244-249.
- 53) 同上 52)、p.249.
- 54) 前掲 51)、240 頁。
- 55) 日沖直子「鈴木ピアトリスと動物たち」松ヶ岡文庫研究年報第 33 号、2019 年、36 頁。
- 56) 同上、39 頁。
- 57) 鈴木ピアトリス「生命の尊重」『青蓮仏教小観』1940 年、224-233 頁 (*The Aryan Path*, 1938)。
- 58) Beatrice Lane Suzuki, “Reverence for Life”, *Impressions of Mahayana Buddhism*, The Eastern Buddhist Society, 1940, pp.238-243.
- 59) 前掲 57)、225 頁。
- 60) 前掲 57)、225 頁。
- 61) 前掲 58)、p.239.
- 62) 前掲 57)、226-227 頁。
- 63) 前掲 58)、pp.242-243.
- 64) 前掲 57)、232-233 頁。
- 65) Beatrice Lane Suzuki, “Buddhism and practical Life”, *Impressions of Mahayana Buddhism*, The Eastern Buddhist Society, 1940, pp.201-218.
- 66) 日沖直子「鈴木ピアトリスの動物愛護論における仏教と神智学」松ヶ岡文庫研究年報第 34 号、28 頁。
- 67) 同上、28 頁。
- 68) Beatrice Lane Suzuki, “Buddhism and Practical Life”, *Impressions of Mahayana Buddhism*, The Eastern Buddhist, 1940, p. 215.

- 69) 日沖直子「鈴木ピアトリスの動物愛護論における仏教と神智学」松ヶ岡文庫研究年報、第34号、2020年、28頁。
- 70) 前掲28)、p.215.
- 71) 前掲69)、29頁。
- 72) 高崎直道「如来蔵思想とは何か」『高崎直道著作集第六巻 如来蔵思想・仏性論Ⅰ』春秋社、2010年、5-6頁。
- 73) 前掲37)、38頁。
- 74) 鈴木ピアトリス「大乘仏教の魅力」『青蓮仏教小観』、1940年、3-4頁（1934年、大阪朝日新聞所載）。
- 75) 前掲69)、31-32頁。
- 76) 前掲2)、7頁。
- 77) Beatrice Lane Suzuki, “Buddhism and Women” ,*Impressions of Mahayana Buddhism*, The Eastern Buddhist, 1940, pp. 223-228.
- 78) 同上、p.226.
- 79) 鈴木ピアトリス「普賢の願いについて」『青蓮仏教小観』1940年、87頁。（*The Hawaiian Buddhist*,1932）
- 80) 鈴木ピアトリス「大乘仏教における慈悲の位置」『青蓮仏教小観』1940年、24-25頁。（*The Young East*, Vol. 1 No.4）
- 81) 前掲74)、4頁。
- 82) 前掲1)、182-183頁。
- 83) Beatrice Lane Suzuki, “A Plea for Animal Welfare” ,*Impressions of Mahayana Buddhism*, The Eastern Buddhist,1940, pp.245-246.
- 84) 鈴木ピアトリス「動物愛護の趣旨」『青蓮仏教小観』1940、236-237頁。
- 85) 前掲2)、7頁。

## **Spirituality in Modern Japan**

### (2) Beatrice Suzuki's spirituality

Masako Miyajima

Graduate School of Humanities and Social Sciences

(Doctor's Degree Program),

Hiroshima University

Beatrice Lane Suzuki (1878–1939) was born in Boston, USA. As an adlescentee, she studied philosophy under William James, Josiah Royce, and George Santayana at the Radcliffe University. Her insatiable curiosity made her study a wide range of thought , including Theosophy and Eastern Buddhism (Hinayana). In 1906, she attended Shaku Sōen's lecture in New York; He accompanied Daisetz Teitaro Suzuki as interpreter. Thereafter, Beatrice obtained Mahayana Buddhism teachings from him. In 1911, she arrived in Japan and married D.T. Suzuki. She participated in many sesshin periods, practiced Zen meditation. During the 1920s–1930s, she visited Kōya-san every summer, as she was recommended by her husband. She was deeply involved with *Mikkyo* of esoteric Buddhism, and discovered the essential teachings of Buddhism: The Shingon was the teachings of non-duality, of Buddha-nature, of enlightenment, of union with the One which brings the Vision of Truth and the Insight into Reality. The Animal Mercy Shelter named “*Jihi-En*” was maintained by her, where she kept many cats and dogs. Beatrice's spirituality was Bodhisattva's Compassion and Love.